北海道合鴨水稲会　水かき通信　第13号　2002－7－16

北海道合鴨水稲会

水かき通信

今号の内容

会員の皆様へ　浅野晃彦（代表世話人）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
勉強会報告　松崎直樹・河本陽介（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第８回総会報告　河本陽介（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
特集：北海道アイガモ農法を支える人々①　新沢舎食鳥処理場（沢崎龍也さん）・・・・6
事務局よりお知らせ（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

会員の皆様へ

北海道合鴨水稲会代表世話人
浅野　晃彦

思いの外、雪解けが早かったのですが、激しい黄砂でハウスのビニールが曇ったり、時ならぬ暑さに見舞われ、水不足の心配をしたり、最近では、暑い日が続いたかと思うと、急に寒くなったりと、皆様方にはご苦労が耐えないことと存じます。

さて、春の総会から、ご無沙汰していましたが、世話人および事務局の体制も、別項にあるように選出されましたので、以後よろしくお願いいたします。また、今年度より、会費が値下げされる事となり、さらに、多くの会員の方の参加を募り、北海道におけるアイガモ水稲同時作の啓蒙と普及、そして、生産と消費の太いネットワークの構築に手を携えて、進んで行きたいと思っています。

夏には、恒例の視察会も行います(※)。今年は、道北ブロックの担当で、私のところを見ていただくのと、全国的に有名な山地酪農の代表的な牧場である斎藤牧場とその敷地内にある、シックハウス症候群療養施設の見学も行いたいと思っています。

アイガモ水稲同時作に関わって、農産物の栽培だけでない、生活や生き方に関わる諸問題に敏感である会を目指し活動していきますので、みなさまのご協力をお願いいたします。

（※事務局の怠慢により編集作業が遅れ、すでに視察会が終了していることをお詫び申し上げます。）

勉強会報告

河本陽介、松崎直樹（事務局）

一昨年度までは、総会とともに全国大会への予行演習をかねて北海道合鴨フォーラムを開催してきました。しかし、今年度は原点に返るという意味も込めて、勉強会を開催しました。内容は、浅野さんの韓国訪問報告と事務局の木村さん（現北海道改良普及員）による修士論文報告です。

中富良野町にある「北の峰山荘」にて、2002 年 2 月 23 日（土）に開催されました。参加者は総勢 29 人でした。

1）浅野報告

はじめに浅野晃彦さんから、昨年、韓国を訪問された時の話がありました。ホームステイボランティアをしていた時に韓国の方がきたことがきっかけで、ハングル教室とラジオ講座(※)で韓国を学びはじめられました。昨年、福岡に行く機会があり、足をのばして韓国のプサンまで行こうと思い、今回の訪問が実現されたそうです。（※NHK ラジオハングル講座 2002 年 3 月号に浅野さんの話題が掲載されています。）

最初に 150ha 位の規模で合鴨農法を行っている村を見学されたそうです。この村では村おこしの一環として、合鴨農法を共同で行っているということでした。食事のときは玄米や黒米、雑穀などをいただいたそうです。また、韓国の食事は日本と同様の発酵文化なので体にはなかなか合っていたとのことでした。

次にプルム農業高校に行き、そこの先生方に色々な話を聞かせていただいたそうです。「韓国では受験勉強が厳しいが、この高校では農作業をしながら勉強する」という話が印象的で、学生である私も頑張らなくちゃと思いました。

その後、先生から講演を頼まれ壇上に立たれたそうです。ビデオを使ったりしながら話したところ、なかなか好評を博したそうです。

最後に「今回の訪問は合鴨農法以外にも色々とためになる訪問であった。韓国の人は日本人と比べて活気があるように感じた。」と感想を述べられました。

浅野さんの話が終わると、昨年、やはり韓国で調査をされた顧問の三島教授より、最近増えてきている韓国の日本向け野菜生産をはじめ農業の情況や浅野報告について補足がありました。

2）木村報告

浅野さんに続いて、事務局の木村篤さんによる修士論文『北海道における合鴨水稲同時作の到達点と存立条件に関する研究』の発表が行われました。

木村さんは、以前、会員の皆さんの協力によりアンケートをとるなど、北海道における合鴨水稲同時作の研究を行ってきましたが、その研究論文が完成し、今回の発表となりました。今回の報告では、アンケートをもとに様々な図表を用いて、北海道における合鴨水稲同時作の性格について説明されました。

北海道と府県とでは生産者の性格が大きく異なっており、大規模で取り組み、地域的には個別で展開するという特徴がある、とのことでした。生産者の性格としては消費者との交流を重視していることや、合鴨肉の販売活動に課題を残しつつも合鴨水稲同時作は慣行稲作と比べて高い収益性を持っていることなどが確認されました。

3）意見交換

以上の報告を受け、質疑応答に移りました。

浅野さんは「ハングル語の勉強は難しいのか」という質問に対し、「ハングル文字がとっつきづらいが、思ったほど難しくはない。日本語と語順が似ていたり、漢字からできた単語もあったりする。」と答えられました。

また木村さんの報告に対しては、「北海道の合鴨水稲同時作が大規模だというが、そもそも北海道と府県では稲作自体の経営規模が違う。面積ではなく経営の割合も考えたら良いのでは」「合鴨の除草効果について述べてあるが、草取りできない田んぼはどうしても出てくるから、割り切ってやるのも重要ではないのか」などといった意見があげられました。

次に、自己紹介をしつつ、合鴨での話で盛り上がりました。主なものを紹介すると「合鴨は 1 年目。家族には内緒で仕入れた。最初は家族に反対されたが、結局自分より家族になついてしまった。」「長年、合鴨農法をやってるせいか、最近は鴨がかわいくなくなってきた。でも、渡り鳥や野鳥にやられてしまうことが多く、困ってしまう。」などといった、様々な失敗談・苦労話がでてきました。

その後、勉強会では以下の５点に興味のある人が多いことが分かり、それぞれについて意見を交換しあいました。

◎肉の利用と販売

やはり合鴨米と一緒に消費者に提供するという形が多いようです。それ以外の方法はあまり一般的ではなく、課題も多いとのことでした。安定供給はできないが、逆にそれを強みにしていく販売戦略もあるのでは、という意見もありました。

◎外敵対策

外敵対策としては、とにかく一匹目を捕られないようにすることが重要だ、という話や、逆にいろいろな対策をしてもすぐに効果がなくなるので、逆転の発想でたくさんの雛を使っている（孵卵機を使って雛を自家調達している）という例もありました。また、何年やっても一度も被害のないところもあり、地域によって差があることもわかりました。

外敵防除ネットに関しては、やわらかいポールだと何かのはずみで外敵の侵入があっても戻ってしまうので、気付かないうちに入られていることがあるそうです。その点に関してはワイヤ

一入りの方がいいかもしれない、とのことでした。

◎ミステリーサークルについて

ミステリーサークルを作らないためには、鴨を一つの田んぼに集中させないことが大事だそうです。

◎米ぬか除草について

米ぬか除草をすると水が温まりにくくなるという欠点があるため、単独で行うのではなく、水を攪拌してくれる合鴨と組み合わせることで効果的になるのではないかという話がありました。

今回の勉強会では、韓国にまで広がったアイガモ農法のすばらしさと同時に、アイガモ農法を行っていく上での会員の皆さんの苦労も知ることができました。アイガモ農法に対する思いをみんなで共有しあえるすばらしい機会であったと思います。

第８回総会報告

河本陽介（事務局）

勉強会に続き、第８回総会が行われました。今回の総会においては、世話人会から年会費の減額と会費区分の変更という重要な議案が提出され、承認を受けました。総会に参加されていない方も、事務局連絡と合わせ、ご確認のほど宜しくお願いいたします。

総会議事は推薦により議長に選出された折坂義一氏により進められました。

１）事業報告・決算

総会ではまず、事務局が 2001 年度事業報告の説明を以下のとおり行いました。⑴2001 年度総会の実施、⑵圃場見学会の実施、⑶全国合鴨フォーラム北海道大会の開催、⑷新世話人の選出、代表世話人の互選、⑸定期通信の発行、⑹全国フォーラム実行委員会の開催、⑺世話人会の開催、⑻全国合鴨フォーラム四国大会準備委員会兼第 1 回全国合鴨水稲会拡大世話人会への派遣参加。

2001 年度の決算は、総収入 402,852 円、総支出 269,692 円、よって 133,160 円が次年度繰越金として 2002 年度予算に盛り込まれることで会場の承認を受けました。

また、一部、前年度総会で承認された予算案の一部変更についても別議案

として世話人会から提出されました。それは 2001 年度の全国フォーラム派遣費です。2001 年度全国合鴨フォーラム四国大会には北海道合鴨水稲会から 3 名の派遣がありました。2001 年度予算において派遣補助費用として 30,000 円×5 名＝150,000 円が積み立てられていたのですが、今回その費用を 50,000×3 名＝150,000 円というように変更することが提案されました。特に今回の全国大会は、当会員からの参加申し込みがなく、世話人会からお忙しいところをお願いして参加してもらったという経緯もあり、この点についても承認を受けました。

２）事業計画および世話人の改選

2002 年度事業計画案は以下の内容で世話人会から提案され、承認を受けました。⑴総会及びフォーラムの開催（2 月 23 日実施）、⑵圃場見学会の実施（道北ブロック担当 7 月 13, 14 日実施）、⑶全国合鴨フォーラム四国大会への派遣参加（1 月 26, 27 日：事後承認）、⑷定期通信発行、⑸世話人会の開催、⑹広報活動の強化、⑺技術開発試験の実施と協力。

また、世話人も改選され、世話人代表は前期に引き続き浅野氏が選ばれました。そして地区代表世話人はそれぞれ道北地区：浅野氏、間山幸雄氏、道央地区：川本隆幸氏、今橋道夫氏、道南地区：大塚利明氏、高嶋浩一氏が選出されました。

３）予算案と年会費の減額および会費区分の変更

予算案に合わせて、年会費の減額・会費区分の変更について世話人会より２つの議案が検討されました。

（１）年会費の減額

１つは年会費の値下げについてです。2001 年度まで、年会費は 6,000 円でしたが、①高額のため新会員が入りにくい、②会費未納者が多いといった問題がありました。また、これまでは全国大会の準備のために派遣費用を多めに予算として計上してきたという背景もあります。そのため、年会費を下げることが世話人会で検討されてきました。今回の総会では事務局より 3,000 円、4,000 円、5,000 円、6,000 円それぞれの予算案が提示され、それをたたき台にして総会で検討を行いました。総会参加者から、「年会費 3,000 円で果たして運営できるのか」との質問が寄せられました。この質問に対しては事務局から、「全国フォーラム派遣費用の削除により十分可能である」と回答をしました。最終的には、全国フォーラムへの派遣費用を削ること、ｅメールの使用により通信費を削ることなどによって、年会費 3,000 円にしようという方向で議論が進み、承認を受けました。

（２）会費区分の設定

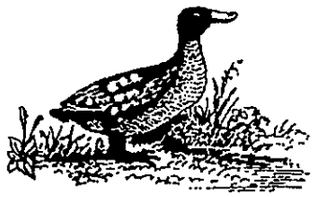
２つ目は会費区分の設定についてです。これまで当会では年会費は特に区分をもうけずに、一律 6,000 円としてきましが、①地域で組織的にアイガモ農法に取り組んでいる生産者グループもあり、事務局に団体での加入の要請も受けていたこと、②アイガモ農法に興味をもった学生がより入会しやすくする必要性、③消費者団体などの新規会員開拓の必要性という以上３点を踏まえて、世話人会から会費区分の設定を新たに設けることが提案され、承認を受けました。

区分設定は、一般会員、学生会員、団体会員の３区分で、一般会員以外の

設定内容は、以下のとおりです。
①学生会員の資格は大学院生を含む会員で、会費は1,000円。
② 団体会員については、任意組合、法人など組織形態に限定はつけず、団体会員で入会するか、一般会員で入会するかは会員（入会希望者）が選択できる。２名以上の団体であれば団体会員になれるが、年会費は10,000円とする。

以上のように会費の変更がなされたことにより、今後、当会の予算規模は縮小することとなります。しかし、滞納が減れば十分にこれまでの活動を維持できますし、また、入会希望者が増加することも期待されます。

そして、以上の会費の変更は、これまで全国大会の北海道開催を一つの目標としてきた当会が新たな段階を迎えたということも示しているのではないでしょうか。会員の皆様からの発展的な新たな提案を事務局としても期待しております。



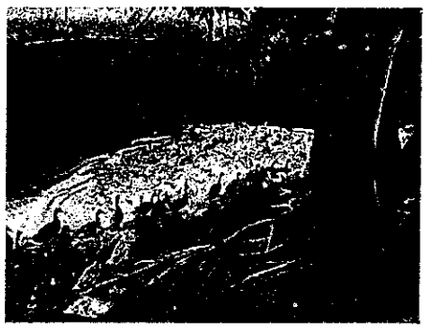
特集：北海道合鴨農法を支える人々①

『新沢舎食鳥処理場　沢崎龍也さん』

河本陽介・宮入隆（事務局）

アイガモ農法が「合鴨水稲同時作」といわれるのは、一つの水田でお米を作り（稲作）、同時に合鴨も育てる（畜産）ところにあります。また、長く雪に大地を閉ざされた期間がある北海道では、合鴨を圃場から引き上げた後も飼い続け、自家孵卵する事にも限界があります。そのため、合鴨を食肉として販売することは北海道のアイガモ農法にとっても、大きな課題となっています。

一方で北海道においては、鴨肉の消費も少なく、放飼後の合鴨の解体処理を請け負う業者の方もあまりいないのが現状です。このような中で、当会の会員であり、アイガモ農法実践者から合鴨の解体処理を請け負って、販売面で支援をして下さっているのが新沢舎食鳥処理場の沢崎龍也さんです。第４回総会（平成10年２月）で当会の指定処理場となっていただいたことからも分かるとおり、沢崎さんは北海道のアイガモ農法、そして合鴨肉食の普及・定着にはなくてはならない存在だと言えます。

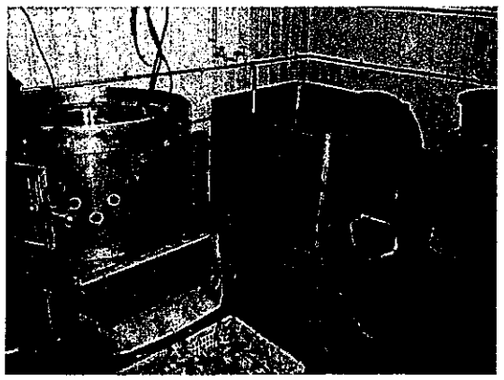


今回は、そんな沢崎さんに北海道アイガモ農法との関わり、合鴨肉販売の状況、そしてアイガモ農法実践者への要望についてお聞きしました。

―沢崎さんが、合鴨の処理をはじめられたいきさつを教えて下さい。

実は私、もともとはトラックの運転手をやっていたのですよ。でも、事故で体調を崩してトラックを運転できなくなってしまったのです。それで、平成３年に養鶏（肉用種）をはじめました。父が副業的に鶏のほか、合鴨、フランス鴨、七面鳥などを飼っていたことも理由の一つですが、運転手時代に、養鶏農家が経営するドライブインでおいしい鳥料理を出しているのに出会ったことも、大きなきっかけとなりました。

アイガモ農法との関係は、その翌年（平成４年）に知り合いの農家の方に頼まれて、解体処理の委託を受けたのが始まりでした。その農家が合鴨のヒナをもらったのが、折坂さんだったのです。それで折坂さんを通じて北海道合鴨水稲会の集まりにも参加するようになり、だんだんと他の農家の方からも合鴨の処理を頼まれるようになりました。そして、平成６年からは処理の委託だけではなく、田圃から引き上げた後の処理に困っている方から、合鴨を引き取って販売するようになりました。



⇧　左が毛抜きの機械。中にはゴムの突起がある。

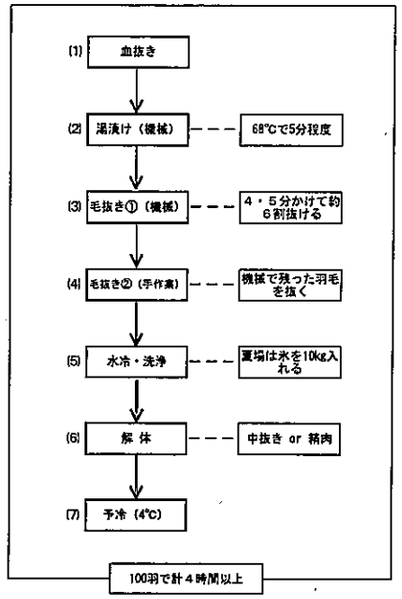


図１　合鴨の処理過程

―合鴨の処理解体はどのように行っているのですか？

合鴨の処理は大きくは(1)血抜き、(2)湯漬け、(3)毛抜き（機械）、(4)毛抜き（手作業）、(5)水冷・洗浄、(6)解体、(7)予冷の７段階に分けられます（図１参照）。

私は鶏の方が本業なわけですが、合鴨は鶏に比べ作業に手間がかかります。例えば、毛抜きには鶏が３分も機械にかければほとんど毛が抜けてしまうのに、合鴨は機械に４～５分かけても６割ほどの毛を抜くことしかできません。そのためもう一度手作業で筆毛などを抜かなくてはならないので、鶏より１段階増えることになります。結果として、鶏では100羽を処理するのに１時間しかかからないのですが、合鴨では４時間以上もかかってしまいます。

毛を抜いた肉を水冷するのは、汚れを落とすほかに、暖かいままだと内蔵内に残っているえさが腐敗し、解体する際に肉に匂いがついてしまうからです。そのため、夏

は水の中に多量の氷を入れます。また、解体する前日には、うるさくても餌をやらないようにして、内蔵のなかをできるだけきれいにしておくように心がけることが大切です。さらに、販売先のなかには、刺身やレアの状態で出すお店があるので、基本的に配達する当日に処理を行って新鮮な状態で出荷しています。

―昨年度はどのくらいの合鴨の処理・販売をしましたか？

処理の委託は、飛び込みで来た方の分も入れて約 1,400 羽ぐらいでした。農家の方から引き取ったのも同じぐらいですね。最近はずいぶん合鴨の処理羽数が増えてきました。引き取り分はだいたい７月末から８月お盆前あたりで全部集まって、10 月ごろまで肥育してから販売します。この期間はえさをどうやって確保するかが大変です。

販売先は、主に鶏で先に取り引きしていた札幌の居酒屋さん（３店）が中心です。今年からは食肉卸売業者にも販売することになっています。主要販売先については、年間通して販売しますが、10 月から 3 月ぐらいまで販売するところや、単発的な販売を行う場合もあります。少ない時でも週に 10 羽ぐらいは注文が入り、週２回に分けて、解体処理して札幌を中心に配達しています（図２参照）。

―合鴨の処理・販売を行っていく上で、現在の問題点はどんなところにありますか？

うちは鶏が本業ですし、一つはやはり手間のかかることですね。現在は私一人でほとんど行っているので、時期によってはかなり大変です。受託処理に関しては、農家の方が一緒に手伝ってくれますが。

最も大変なのは餌集めです。特に 8 月末～10、11 月までは合鴨の数が特に多いですから、一日で麦だけでも６俵半（約 50 kg）もの餌が必要になってきます。餌代だけでもばかになりませんからね。いかによい肉にして、コストを抑えるかが問題です。

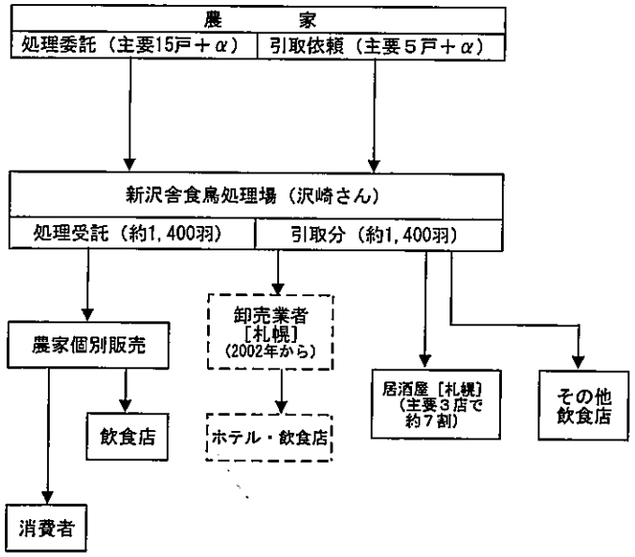


図２　新沢舎食鳥処理場を中心とする合鴨肉流通（2001年度）

うちでは主に学校給食の残さ、トウモロコシ、米ぬかを混ぜたものの中にヨーグルトをいれて発酵飼料を作っています。発酵飼料をやることで、合鴨を健康に育てて、よい肉質にしています。脂身が嫌なにおいがしたり、苦かったりするは、抗生物質や魚ものの餌を多量に与えているからです。あとはきれいな水たまりを作ることも重要ですね。でないと合鴨のおなかに土がついてしまい、肉が泥臭くなってしまいます。

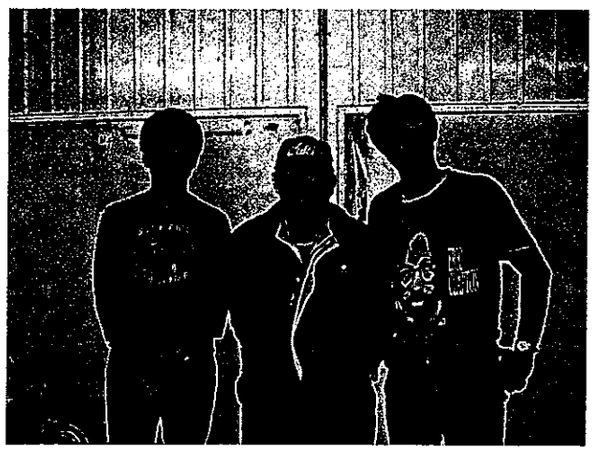
肉質に関してもう一つの問題なのは、肉質を均質にしなければならないことです。農家の方のヒナの購入先、種類がそれぞれ違っていたり、与えているえさが違ったりしているので、どうしても差が出てしまいます。私のところで肥育している間は、肉質をいかに均等にしていくかも課題となります。実際に販売先からも均質でないといわれることがありますが、この辺の事情を説明しています。

―最後に農家の皆さんに対する要望などありますか？

合鴨は米を作るためだけの道具ではないのだから、引き上げたらそれで終わりでなく、もっと食肉として販売していくことにも力を入れてほしいです。今後も販売先を見つけたり、需要先へ生産側の情報を流したり、お手伝いしていきたいと思いますが、やっぱり、売り先のないものはこちらで引き取るというだけでは問題もありますし、皆さんと協力しあいながらおいしい合鴨肉にして、消費を増やせたらと思います。

今回、沢崎さんにお話を聞かせていただいて感じたことは、合鴨の処理が思った以上に大変であるということ、そして沢崎さんの合鴨肉に対する自信とこだわりでした。最近は輸入ものの合鴨肉をよく見かけますが、それとは全然違うものであり、「うちの合鴨肉は刺身で味わってもおいしい」とおっしゃっていました。どんなに面倒でも、配達する日に解体処理して新鮮なうちに、冷凍せずに届けること、飼料づくりに対するこだわりなどからも分かります。

ちなみに JR 札幌駅北口前にある『味百仙』は得意先で、沢崎さんのところの合鴨肉がマスターのこだわりメニューで味わえるそうです。皆さんもぜひ一度、足を運ばれてはいかがでしょうか？



⇨ 左より、河本、沢崎さん、宮入。

事務局よりお知らせ

□会費減額と会員区分の設定について

この度、第８回総会での決定を受けて、新規入会の促進と会計の軽量化のために会員区分の設定と会費の減額を行い、今年度（平成14年度）から実施します。

以前から世話人の中では、「年会費が高額で入会しづらくないか」「１年滞納したらすぐに10,000円を超えるので、会費が払いづらいのではないか。」との意見がありました。そこで、事務局の試算をもとに世話人会の中で協議をした結果、作業の効率化、事務処理等のコンピューター化を計れば、従来の半額くらいでも何とか運営可能と判断し、2002年度から年会費を3,000円とすることにしました。

また、会費区分についても合鴨水稲同時作に興味を持った学生の方々がさらに気軽に入会できるように、従来の会員（一般会員）のほかに新たに学生会員の区分を設置し、会費は年額1,000円とすることが承認されました。さらに団体会員の区分を設け、生産者グループでの一括入会も可能となり、消費者団体など他団体との交流や新規法人会員の開拓の体制も整ったといえます。

以上の変更を踏まえ、本年度総会で承認されました今年度の予算は、以下のようになっております。今年度からは全国大会の派遣費の支出を廃止し、その他支出項目も最低限のものに改定しております。今回の改定は、会員一人ひとりの滞りない会費納入が土台となっています。どうぞご理解をよろしくおねがいします。

（根釧農試　日向）

2002年度予算

収入			支出		
項目	金額	備考	項目	金額	備考
一般会員会費収入	162,000	3,000円×54人	世話人会交通費	80,000	20,000円×4回
学生会員会費収入	6,000	1,000円×6人	同　昼食代	21,600	600円×9名×4回
			圃場見学会案内発送費	7,000	
			「水かき通信」発送費	16,500	5500円×3回
			その他の文書通信費	8,000	
			会費払込手数料	3,500	70×50人分
			雑費	10,000	事務用具、消耗品等
			事務局手当	10,000	
実収入　計	168,000		実支出　計	156,600	
前年度繰越	133,160		予備費	144,560	
合　計	301,160		合　計	301,160	

□電子メールによる各種連絡の送付について

情報のIT化（死語かな･･･）に伴い、水稲会でもEメールを使った連絡の送付を開始します。

自宅にインターネットを接続しているパソコンがあって、メールアドレスをお持ちなら、総会や勉強会などの定例行事の案内や、いろいろなお知らせを電子メールで簡単に受信することができます。配達物をうっかり見忘れるということもなくなりますし、不明な点があった場合の連絡も迅速にすることができるのでとても便利です。事務経費の削減にもつながりますので、ぜひご検討ください。

Eメール送信をご希望の方、ご不明な点のある方は、事務局の河本までメールか電話でご連絡をください。よろしくお願いします。

（根釧農試　日向）

□北海道合鴨水稲会入会案内

当会の主な活動は、総会及びフォーラム、圃場見学会、『水かき通信』の発行、全国合鴨フォーラムへの会員派遣等です。入会されますと、行事の案内状、『水かき通信』が届きます。入会の手続きは、当会事務局に連絡して頂くと入会申込書を送りますので、それに記入後、送り返して頂き、合わせて年会費3,000円を納入して頂くと入会できます。

□水かき通信記事投稿の募集

水かき通信に掲載する原稿を募っています。気軽に原稿を事務局のほうまで送って下さい。随時受け付けています。原稿の形式は問いません。

□2002年度会費納入のお願いとお詫び

北海道合鴨水稲会の2002年度年会費3,000円の納入をお願いいたします。同封の振込用紙をそのままお近くの郵便局へお持ちいただいてお名前を書いていただくだけで、その他の面倒な記入や手数料は一切必要ありません。合鴨水稲会の予算は、全て皆様一人ひとりの年会費からなっておりますので、どうぞよろしくお願いします。

なお、今年度および過年度の年会費納入のご案内に関しましては、別紙にてお知らせいたします。

最後になりますが、事務局の不手際で納入のご案内が遅れた事を深くお詫び申し上げます。

口座番号：02700 - 3 - 38241
加入者名（振込先）：北海道合鴨水稲会
払込先払出局：札幌北七条郵便局

編 集 後 記

今年度から事務局を担当することとなりました河本です。出身は京都です。できの良い兄、弟に囲まれ惨めな幼少期を過ごし、一時は漁師を目指したこともありますが、船酔い体質であることが発覚し大学院まで来ました。北の大地はこんな僕でさえ懐でかく包み込んでくれています。どうか今後とも宜しくお願いいたします。(河本)

中標津の根釧農業試験場に来て、はや3ヶ月。赴任前は、畑違いの酪農の分野に不安でいっぱいだったけれど、担当が環境問題なのでわりと違和感なくやっています。北海道はどの作目でも耕地面積が広いので、他府県に比べて環境負荷への認識がおろそかになりがち。今でも国道のすぐそばの牧草地には、景観にそぐわない山積みの牛フンが並んでます。これからの農業のキーワードは何といっても、「環境」と「自然との共生」。合鴨水稲会も新しい農業に向かっていく嚆矢になれたらなと思う最近です。(日向)

なんか時間の流れが早く感じる今日このごろ。当会事務局をしていた後輩の面々もいつのまにか社会人。うちの悠太郎も保育所に行くようになって早5ヶ月。日々成長しているのが分かります。おまるでウンチをしている姿を見ているのも楽しいです。牛フン、子供ウンチと編集後記はウンチつながりか！まったく僕の成長だけは中学生以来止まっています。(宮入)

北海道合鴨水稲会　水かき通信　第13号
2002年7月20日発行
(連絡先) 北海道合鴨水稲会事務局
〒060－8589　札幌市北区北9条西9丁目
北海道大学大学院農学研究科
農業経済学講座
河本陽介・宮入隆
TEL：011 (706) 4941
FAX：011 (706) 4179